

米一粒

大津 隆文

毎年四月下旬に春の褒章、叙勲の受賞者が発表になる。マスコミで主な受賞者の功績や受賞の言葉が紹介され、感心したり同感したりする。今年は紫綬褒章を受章された俳優段田安則氏の言葉に胸を打たれた。氏はNHKで放映中の大河ドラマ「光る君へ」で藤原道長の父親役、一族の栄達のため子や孫も手駒扱いする権謀術数家を迫力ある演技で見事に務めた名優。氏は受賞に際し「米一粒作れぬ私が…望外の喜び」と述べたと報じられた。何と謙虚なことかと驚いた。

俳優という仕事は世の大衆に楽しみ、喜びを与えてくれる立派な仕事ではないか。「米一粒作れぬ」という言葉が出たのは、もしかするとその背後に「物作り」に対する気後れ、弥生以来の農本主義的日本文化の影響があるのかもしれない。

実は私も公務員だった当時、自分は世の中に何か価値を生んでいるのかと悩んだ。とくに国会の質問待ちで夜遅くまで待機している時や、権限争いで省内の他局、他省庁と際限のない論争をしている時は空しかった。民間で世の人々に役立つ「モノ」を生産している人達が羨ましかった。

今や仕事からリタイアして本当に米一粒作っていない。家庭でも妻と違い、家事をしたり子や孫の相談相手や世話をする訳でもない。家族に対し昔は「誰のお蔭で飯が食えると思っているのだ」と高姿勢だったが、今や「食べさせていただいています」との立場だ。世のため人のために役立つことはなく、世間、家族のご好意で生かされているとしか言いようがない。無能無益の老人には有難い世の中だ。

生かされている身であるが、では何のために生きているのかと問われると、これが難しい。まだまだ楽しいことがあるから、というのが取りあえずの答である。ペンクラブの仲間と一杯やることや、三度三度の食事等身近に楽しみがある。ではその楽しみが感じられなくなったらどうするのか。よく分からない。

最近句会に出した拙句

春霖や老いの難問生きる意味

残念ながら一点も入らなかつた。